

◇新刊紹介

間部家文書(第四卷) 間部家文書刊行会編
(鯖江市資料館内) 昭和六一年八月 B5
判 七〇五頁 鯖江市刊 定価七、〇〇〇円

本書は鯖江藩七代藩主・詮勝の在任期間にあたる文化一二年(一八一五)から文久二年(一八六二)まで四八年間の「藩庁日記」のうちから、重要記事を抜粋して収録したものである。実は詮允の跡を継いだ詮勝が、とりわけ安政五・六兩年の老中在任中は、大老井伊直弼の片腕として、中央政局で重要な役割を果たす。本書では、開国・攘夷の渦中にあって、死中に活を求め、懸命な働きをした詮勝の心情を、「日記」の各所にかいまみるとができて、甚だ興味深い。

そこで「日記」の一部を紹介すると、幕末の日本海側への「外庄」につき、弘化元年(一八四四)十一月の東蝦夷地からの通報へ一

一月二〇日条が初出で、その後嘉永元(一八四八)・二兩年には、能登国・隠岐国沖合での「異国船」出沒への沿岸諸藩の緊迫した情勢を示す書状が掲げられる。さらに嘉永六年(一八五三)六月のペリー艦隊の浦和来航のさい、鯖江藩では藩兵を江戸に急派することを決定(六月一日日条)するなど、「外庄」

への真剣な対応策がうかがわれる。こうして翌安政元年には洋式兵制を採用(二月一二日条)し、抜本的な軍制改革に取り組むが、一方において、藩校「進徳館」を中核とする教育学振興にも大いに力こぶを入れるのが注目をひく。また同藩の民衆教化策として、石門心学を取りあげ、心学舎「謙亨舎」を鯖江に創設し、家中・町在に道話聴聞を奨励する(九月八日条)という熱の入れようで、この点、若越諸藩の教学施策のうえで、大いに精彩を放つところといえよう。

校訂は隼田福井大学教授・松浦同大学助教・舟沢県立図書館奉仕課長が行い、詳細な解説を舟沢課長がしるしている。

(三上一夫記)